



そんな心の傷をもったキムが、レイチェルの華やかな結婚式やパーティーに出席して何か問題でも起こしたら大変だが、それは大丈夫？

## 目指したのは、最も美しいホームビデオ

この映画の監督は、『羊たちの沈黙』（90年）でアカデミー賞作品賞と監督賞を（他に脚色賞、主演男優賞、主演女優賞も）受賞したジョナサン・デミ監督。他方、この映画の脚本を書いたのはシドニー・ルメット監督の妹の娘であるジェニー・ルメット。プレスシートによると、ジェニー・ルメットの脚本を一読してデミ監督は、「真実や痛みやユーモアに対する大胆なアプローチがとても気に入った」と監督を快諾したらしい。

そこでデミ監督が本作で目指したのは、最も美しいホームビデオ。そこで採用されたのが、リハーサルなしでの手持ちカメラによる撮影という基本方針。つまり、素人が撮るような手持ちのビデオカメラによる撮影の手法を取りながら、それを最も美しいホームビデオにしようというわけだ。冒頭の車の中のシーンや、キムが自宅に戻り2階に上がっていく姿を背後から追い続けるシーンなど、その撮影手法の特徴はすぐに明らかになる。そしてそれは、リハーサル・ディナー、結婚式、ホームパーティーなど、大勢が集まるシーンでより顕著になるが、さてその成否は？

また、レイチェルの結婚相手となるシドニー（トゥンデ・アデピンペ）をミュージシャンという設定にしたため、パーティーには彼の友人がたくさん出席し、多くの音楽が歌われ、かつ演奏される。したがって、カメラがどこを向くのか？誰のどんな表情を捉えるのか？それは、一瞬の判断で決まるらしいから、俳優陣もミュージシャンたちも大変だ。

そんな撮影方針の中なればこそ生まれた、キムやレイチェルを中心としたホームドラマながら迫真の演技に注目！

## 細やかに描かれたバックマン家の人々の人物像に注目！

デミ監督が目指した『美しいホームビデオ』の達成度もお見事だが、それ以上に感心したのは、バックマン家の人々の人物像が明確に描かれていること。

第1のポイントは、「なぜキムが麻薬中毒者になったのか？」ということ。それは薬物依存症の患者たちが集まるミーティングでキムが語る告白によって明らかになる。それは彼女が16歳のとき、鎮痛剤でハイになったまま、年の離れた弟イーサンを車で公園に乗せていき、その帰り道、車ごと湖に落ちてイーサンを溺死させてしまったという悲痛な体験だ。

第2のポイントは、イーサンの死が原因かどうかは知らないが、レイチェルとキムそしてイーサンを産んだ母親アビー（デブラ・ウィンガー）が父親ビルと離婚したため、今、自宅に戻ってきたキムを迎えるのが、父親が再婚したキャロル（アンナ・ディーヴァー・スミス）だということ。再婚して今は別の家庭をもっているアビーもレイチェルの結婚式

には当然参加するが、デブラ・ウィンガーという大物女優が演ずるアビーのキャラに注目！ 他方、キムにとっては義理の母親になるキャロルは、イーサン事件に端を発する父と娘たちそしてレイチェルとキムの言い争いを彼女なりに心配していることは明らかだが、それに口をはさめないのは仕方なし・・・？

第3のポイントは、イーサンの死亡によって薬物依存症となったキムを、両親特に父親が過度に保護しているとずっと感じてきた長女のレイチェルと、自分がいくら謝っても許されることはないと自分を責めながら、なお家族の絆を求めるキムとの間に起こる女同士の確執と対立。

バックマン家の1人1人の人物像についての、これらの細やかな分析は、やっぱり女性脚本家でなければ無理だろう。またシドニー・ルメット監督の娘としてさまざまな作品をみてきたジェニー・ルメットなればこそ、それが可能に。

## 結婚式の感想 その1 手作りの良さ

サブプライムローン問題を契機として発生した世界的金融危機の責任は、アメリカ人の「浪費グセ」と、それを理論的に正当化した「金融工学」にあるらしいことは今や誰の目にも明らかに？ レイチェルの結婚式やパーティーを見ると、家の広さ、庭の広さ、招待客の多さなど豪華さや派手さが目立つが、この結婚式は金融危機がこれほど深刻になる以前のことだから仕方なし？

他方、豪華さと同時に目立つのが手作りの良さ。日本では結婚披露宴はホテルで行うことが多く、一流芸能人になると数億円ということも珍しくない。しかし『レイチェルの結婚』はすべて手作りだから、アットホームな香りがブンブンにおう良さがある。こちらあたりが、何でも「右へならえ」となる日本人と比べアメリカ人の利口なところ・・・。

## 結婚式の感想 その2 個性的なスピーチのすばらしさ

アメリカの結婚式では「花嫁付添人」が不可欠ということ、私は『いつか眠りにつく前に』（07年）や『幸せになるための27のドレス』（08年）『近距離恋愛』（08年）を観てはじめて知ったが、『レイチェルの結婚』を観てはじめて知ったのが、結婚式の前日のリハーサル・ディナーという習慣があること。リハーサルディナー、結婚式、結婚披露パーティーと、丸2日間も続くと、事前準備を含めて花嫁花婿は大変。特に『レイチェルの結婚』はレイチェルの手作り色が強いから、レイチェルの気苦労は生半可ではないだろう。

この映画のリハーサル・ディナーにおいて、友人や家族たちが1人1人立ち上がってスピーチする姿を見ていると、その自然さ、自由さとスピーチ内容のすばらしさに感心させられる。多くの人の前でしゃべるのが苦手あるいは慣れていない日本人はどうしても形式的になり、原稿を読んでしまうことになりがちだが、この映画を観ると、アメリカ人のス

ピーチは日本人のそれとは全然違うことがよくわかる。もちろんそれぞれ事前に構想は練っているのだろうが、スピーチの内容は剛性的で率直な言葉で綴られている。

もっとも、この席でキムが薬物依存症に陥った自分の身の上話をしながら、さかんに謝罪 (Apologize) したことが、「私の結婚を祝うディナーで自分の身の上話をペラペラと。この子は自分の病気が世界の中心だと思ってるのよ！」と気に入らないのがレイチェル。そのため、帰宅後かなり激しい姉妹ゲンカが勃発することになるが、そんな2人のシリアスな演技にも注目！

## 姉妹対立の原因は？ その1 父親の愛情の奪い合い？

キムが9カ月ぶりに自宅に戻ってきた時、父親のポールも義母のキャロルも、そしてレイチェルも花嫁付添人のエマもキムを快く迎えてくれたのは当然。しかし、常にタバコから手を離さず薬物依存症の話をしたり、何かと自分の存在を主張するキムに対して、レイチェルは今少しづつイライラし始めたよう。

「花嫁付添人は妹の私がやるべき！」そんなキムの主張をレイチェルが受け入れたためエマは大むくれたが、これはキムの顔を立てたレイチェルの苦肉の裁定。ところが、いつもキムのことを心配し何かと気遣いする父親ポールに対して、キムが「いつも監視している！」とイライラし始めたからヤバイ。また、そんな風にポールがキムのことばかり心配している姿を見てイライラするのがレイチェル。「結婚式とそのパーティーの主役は私なのに、一体キムは何サマなの！」となるわけだ。

リハーサル・ディナーから帰宅した夜の姉妹バトルの中、突然レイチェルが妊娠したことを告げ家族が喜びに沸き返る中、「こんな大ニュースで私の話を吹っ飛ばす気？」と喰ってかかるキムの姿にはレイチェルも私も唖然。こんな姿を見ていると、姉妹対立の第1の原因は、父親の愛情の奪い合い？

## 姉妹対立の原因は？ その2 キムは嘘つき？

結婚式を翌日に控えて姉妹の対立が決定的になったのは、美容院の中で起きたある出来事。そこで偶然キムに声をかけてきた男は、数年前にキムと同じ病院にいらしい。この男はキムに対して「君の強さに勇気づけられた」と話しかけてきたが、その話とは「姉妹は幼い頃父親から性的虐待を受けて、姉は拒食症になった」というとんでもないでっちあげ話。そんな話が自然と耳に入ってきたレイチェルが怒ったのは当然だ。

キムを残したままレイチェルは車で自宅に戻ったが、後を追うようにタクシーで戻ったキムとレイチェルは父親の目の前で激しくバトルを展開。その結果、キムのでっちあげ話は父親の耳にも届くことに。そうなると、さすがのポールも激怒したのは当然。

こんな姿を見ていると、姉妹対立の第2の原因は、キムが嘘つきなこと？

## 主演女優賞ノミネートは、こんなシーンから

姉妹の實の母親アビーを演ずる1955年生まれのデブラ・ウィンガーは『デブラ・ウィンガーを探して』(02年)というタイトルの映画ができたほどの有名女優(『シネマルーム3』195頁)彼女は『愛と青春の旅立ち』(82年)、『愛と追憶の日々』(83年)、『永遠の愛に生きて』(93年)で3度もアカデミー賞主演女優賞にノミネートされている。映画後半のハイライトは、そんなアビーとキムとの衝突!

深く傷ついたキムが父親から厳禁されているにもかかわらず、自らハンドルを握って出向いたのは、実母アビーの家。そこでキムは「なぜ、ラリっている私にイーサンを任せただの?」と詰め寄ったわけだ。これにはアビーもビックリ。何を今更?イーサンの死亡で大きな喪失感を味わうとともに、離婚にまで至ったのは一体誰のせい?そこまでは言わないものの、アビーの動揺する気持を名女優デブラ・ウィンガーが熟演。その結果思わず(?)アビーの手がキムの頬に飛んだが、それに対して逆にキムはアビーを突き飛ばしたからすごい。そんな、ものすごい母娘バトルが展開されるわけだ。その直後家を飛び出し、極度の興奮状態で泣きながらハンドルを握ったキムは、道路をそれて山の中へ一直線。さあエライことに……。

キムを演じた美人女優アン・ハサウェイは第81回アカデミー賞で主演女優賞にノミネートされたが、私の見立てでは、このデブラ・ウィンガーとの衝突シーンがその大きな要因になったことはまちがいなし!

2009(平成21)年2月18日記

### やっぱりムリ!もう少し努力と実績を!

第81回アカデミー賞主演女優賞をめぐるアンジェリーナ・ジョリー、メリル・ストリープらの「女の戦い」は興味津々。その中、大半が「大穴」で一致した(?)のがアン・ハサウェイ。

『レイチェルの結婚』では従来の清純派美人女優のイメージをかなくり捨てて薬物中毒患者の役に挑んだが、やはり海千山千の他の4人に勝つのはムリ。それは、その後の『パッセンジャーズ』(08年)での凡庸な演技(?)をみても明らかだ。

関根恵子が『高校生ブルース』(70年)で、宮沢りえが篠山紀信の『サンタフェ』(91年)でオールヌード姿をさらすことによって脱皮したように、アン・ハサウェイもどこかで美しいヌードをさらけ出すことによって一皮むけなれ!そうすれば、きっと『愛を読むひと』におけるケイト・ウィンスレットのように、近い将来主演女優賞を受賞できるのでは?

2009(平成21)年6月1日記